

◎ 留学生との交流によって国際感覚を養う。

◎ 支援活動を通じて復興の現状を学ぶ。



「どんな小さなことでも支援することに大きな意味がある。引き続き復興支援に携わりたい」と話す、トムソン准教授。

東日本大震災が起こった平成23年、アメリカから岩手県立大学にボランティアの申し出が舞い込んだ。連絡をしたのは、オハイオ大学のクリストファー・S・トムソン准教授。かつて岩手県に住んでいたことから、「被災地の力になりたい」と本学の知人に声をかけ、共同での支援活動を打診したのだ。これを受けて本学では、学生同士の国際交流も踏まえてボランティアプログラムを作成。平成25年度までの3年間で延べ78名の学生たちを海外から迎え、大槌町や陸前高田市を中心に菜の花を植える活動や、仮設住宅などに飲料水やお茶ペットボトルを手渡しで届けるボランティアへの受け入れを実施。昨年から、新たに「本庄国際奨学財団」の留学生たちも仲間に加わり、オハイオ大学、本学とともに支援活動に取り組みながら、交流を深めてきた。

支援の心がつないだ国際交流で海外と岩手の絆を育んでいく

しかし、被災地の状況が変わっていく中で、求められる支援活動も次第に変化。4年目となる今年は、「語り部」による震災体験講話や「郷土芸能を通じた交流活動」などを新たに取り入れ、教育的・文化的な側面も踏まえたプログラムを構成している。トムソン准教授は「事前に被災地の状況を勉強して参加していますが、実際に被災地の現実を目の当たりにして、復興が進んでいないことに驚く学生が多いですね。しかし、国籍の異なる学生たちが活動をとにもすることでお互いの刺激になったり、新たな友情が育まれるなど、大きなメリットを感じています」と、共同活動の効果を実感している。一方、本学においても国際交流を兼ねた支援活動は、大切な学びの場。被災地の現状を知り支援の心を育むと同時に、他国の学生の考え方や行動に触れ、改めて自分を見つめ直す貴重な機会となっている。



9/26、27は大槌町、9/28は陸前高田で活動。参加者はオハイオ大学：学生11名、岩手県立大学：学生22名、本庄国際奨学財団：奨学生24名、大槌高校生：8名(9/27のみ)



「活動に参加してみて、支援を継続することの大切さを学びました」と話す、盛岡短期大学の吉田涼奈さん。

このプロジェクトは来年で一区切りとなるが、育んだ絆をさらに深めるため新たな形で交流をつないでいきたいと考えている。

ボランティア活動を通じて異文化に触れ、友情を温める

今回のボランティアには、本学学生も含めて総勢87名が参加。特に本庄国際奨学財団では、インドネシア、ウガンダ、ジンバブエ、キシコなど、18カ国の留学生が顔を揃えた。3日間の活動中、英語と日本語を交えてコミュニケーションを取り、寝食をともにした学生たちは、短い間にすっかり友だちに。「一緒に活動して感じたのは、ボランティアに国境の壁はないということ。彼らは自分たちよりも親身になって、被災地を心配していました。その姿を見て、ボランティアは全世界の人々が協力できる素晴らしいことだと実感しました。もし外国で災害が起こったら、私も支援に出向きたいです」と話すのは、盛岡短期大学の吉田涼奈さん(国際文化学科・1年)。

国を超えたつながりで復興支援にスクラム!

去る9月26日から28日までの3日間、大槌町と陸前高田市においてオハイオ大学、本庄国際奨学財団の学生と一緒に、復興支援活動を行った。これは震災直後から毎年続いている、国際交流を兼ねた復興支援プロジェクト。盛岡短期大学部を中心とした本学の学生たちは、様々な国籍の学生たちと協力し合いながら、活動に汗を流した。

